

京都国際写真祭

14th EDITION

2026 4.18 SAT-5.17 SUN

PRESS KIT

JP

KYOTO

GRAPHIE

international
photography festival

ABOUT KYOTOGRAPHIE

KYOTOGRAPHIEは、歴史・芸術・文化が今に息づく都市として世界的に知られる京都を拠点とする国際写真祭です。毎年春、町家から現代建築、美術館、寺院に至るまで、京都の様々な文化的建築空間が会場として開かれ、街そのものが写真を祝祭する没入的な体験の場と変貌します。

KYOTOGRAPHIEが来場者に提供する特別な体験は、多層的で独自性に満ちており、京都という都市だからこそ実現し得たと言えます。KYOTOGRAPHIEは従来の展示空間に縛られることなく、斬新な会場構成（セノグラフィー）で知られています。国内外の建築家や職人との協働によって生み出される空間は、従来のフォーマットを刷新し、芸術と空間の関係を新たに切り拓いていきます。

本祭の中心となるのがメインプログラムの展示です。共同創設者／共同ディレクターのルシール・レイボーズと仲西祐介は、毎年ひとつの大きなテーマを掲げ、そのテーマを軸にキュレーションを進めています。参加アーティスト、キュレーター、会場、スポンサーとの緊密な協働を通して、テーマを多層的に照らし出すプログラムを作り上げています。

KYOTOGRAPHIEは展示だけにとどまりません。アーティストと直接出会えるトークイベント、次世代の才能を支えるポートフォリオレビュー、参加アーティストが直接指導するマスタークラス、子ども向けの教育プログラムなど、多様なアクティビティを体験いただけます。こうした取り組みを通じて、来場者は写真表現の深さと可能性を多角的に実体験することができます。KYOTOGRAPHIEの核にあるのは、「人」「場所」「思想」が交差する場です。地域と世界、伝統と現代、新進と成熟——さまざまな文化と視点が会合う空間であり、何よりも「違い」が祝福される場です。今年、第14回を迎えるKYOTOGRAPHIEは、つねに創造し、再構築し、縁をつむぎ、変わり続けることを使命として、前進してゆきます。

EDGE

THEME 2026 EDGE

捉えどころがなく、常に変化を続ける「EDGE(エッジ)」は、物理的、社会的、心理的な様々な形をとって立ち現れる。断崖に身を置いたときの緊張感、衝突が起きる瀬戸際、周縁で生きることの不安定さ、新しい先端を行く決意——そんな感覚を呼び起こすかもしれない。

写真もまた、「際」をその内側に抱えている。

写真というメディアは誕生以来常に周縁に位置し、記録と芸術のあい、真実と虚構のあいだを揺れ動いてきた。いま、新たなテクノロジーの到来と画像が氾濫する時代のはざま、写真はあらたな臨界点に立たされている——先が見えない不安と、何かを発見する高揚感。その両者が共存する場所に。

「エッジ」の向こう側に何があるのかは、誰にもわからない。

混沌とともに崩壊へと向かうのだろうか。

それともその「エッジ」は、別の世界へと誘う入口なのだろうか。

今年のKYOTOGRAPHIEは、この「あい」を、緊張と変化が同時に生まれる場所として描き出す。ラディカルな写真表現の試みの隣で、都市の衰退を見つめる作品があり、周縁に迫りやられたコミュニティの記録は、植民地主義や領土争いといった現在進行形の問題と交錯する。

また、自然のもつ超越的な力にもレンズを向け、「ギリギリの際」に到達することで、視点・思考・創造の新たな地平がそっと開いていくのが見えてくる——たとえ環境的にも、政治的にも、個人的にも、もっとも暗い現実のさなかにあったとしても。「エッジ」は、不確実性に満ちた場所であり、同時に可能性の生まれる場所でもある。

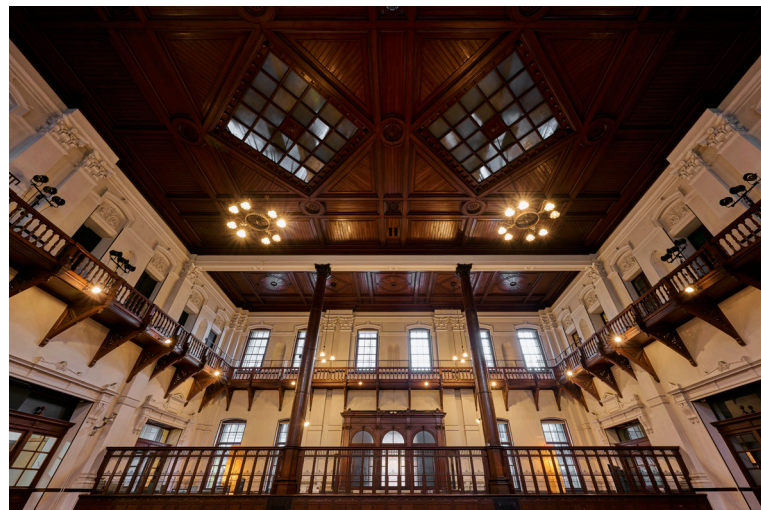
そしてひとつの終わりが、次の始まりへと導かれる。

KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭
共同創設者／共同ディレクター
ルシール・レイボーズ & 仲西祐介

VENUES



京都市京セラ美術館 本館 南回廊 2階
森山大道、アーネスト・コール、ピーター・ヒューゴ



京都文化博物館 別館
リンダー・スターリング



八竹庵 (旧川崎家住宅)
A4 Arts Foundation、ファトマ・ハッスーナ



誉田屋源兵衛 竹院の間
タンディウエ・ムリウ



出町榎形商店街、DELTA/KYOTOGRAPHIE Permanent Space
タンディウェ・ムリウ



ASPHODEL
柴田早理



ygon
福島あつし



嶋臺(しまだい)ギャラリー
西館:アントン・コービン 東館:フェデリコ・エストル

14th EDITION
2026 4.18 SAT-5.17 SUN
Exhibitions

森山大道

A RETROSPECTIVE

Presented by Sigma
In collaboration with Instituto Moreira Salles
and Daido Moriyama Photo Foundation

キュレーター: チアゴ・ノゲイラ

会場: 京都市京セラ美術館 本館 南回廊 2階

**作品と共に森山大道たらしめた雑誌や写真集などのメディアウムにも
焦点を当て、ラディカルかつ精力的なその軌跡を全方位にたどる**

「この1枚1枚の写真のなかに、思想があるのか、世界があるのか、歴史があるのか、人間がいるのか、美があるのか、醜があるのか僕にはまったく分かりません。そして、どちらでもよいように思えるのです。ただ僕が、自分の息づかいそのままに、身のまわりのものを採録したまでのことです」

—— 森山大道 (アサヒカメラ 1973年6月増刊号)

「この展覧会は、森山大道の驚異的な作品群に分け入るだけでなく、メディアをめぐる彼自身の言葉や思索にも踏み込み、彼が歩んできた道のりの実相を示す機会となる」

—— チアゴ・ノゲイラ (2025)

およそ60年にわたるキャリアを通して、森山大道は写真という表現の慣習をつねに揺さぶりつづけてきました。大阪に生まれた彼は、身のまわりの世界を精力的に記録しながら、カメラや印刷メディアが果たす機能、そして私たちがどのようにイメージを流通させ、消費しているのかについて、その役割に問いを投げかけてきました。こうしたラディカルな姿勢は、敗戦と、それに続く7年間のGHQ占領下を経て、急速に変化していった戦後日本で育つことで形づくられたものと言えます。こうした決定的な数十年のあいだに自身の表現を見出し、またアンディ・ウォーホル、ウィリアム・クライン、ジャック・ケルアックといったアメリカの作家

たちからの影響を受けながら、森山は写真を通して「現実の表象」や「真実と虚構」、「記憶」と「歴史」について思索してきました。KYOTOGRAPHIE 2026では、モレイラ・サレス研究所(ブラジル)のチアゴ・ノゲイラがキュレーションし、森山大道の全体像を見渡す回顧展を開催します。同展はこれまで、モレイラ・サレス研究所、C/O Berlin (ドイツ)、フィンランド写真美術館、フォトグラフィア・エウロペア写真祭(イタリア)、エリゼ写真美術館(スイス)でも開催され、ロンドンのフォトグラファーズ・ギャラリーでの展示はガーディアン紙の「年間最優秀写真展」に選出されました。今春の展示では、京都市京セラ美術館と



From *Letter to St-Loup*, 1990. © Daido Moriyama/Daido Moriyama Photo Foundation.

いう特別な空間に合わせ、新たに構築されます。ノゲイラは、森山の芸術的な歩みを決定付けてきた無数の雑誌や出版物に特別な焦点を置き、本展では森山の代表作の多くが生まれたフォトエッセイ、伝説的な雑誌『プロヴォーク』への寄稿、そして写真に根本的な問いを投げかけた画期的な写真集『写真よさようなら』(1972)といった軌跡が含まれる予定です。

森山大道「A RETROSPECTIVE」展は、Daido Moriyama Photo Foundationのサポートと、神林豊氏、町口覚氏、木村一也氏の協力により制作されています。



From *Pretty Woman*, Tokyo, 2017. © Daido Moriyama/Daido Moriyama Photo Foundation.



Stray Dog, Misawa, 1971. From *A Hunter*. © Daido Moriyama/Daido Moriyama Photo Foundation.

森山大道

1938年大阪府池田市生まれ。デザイナーから転身し、岩宮武二、細江英公の助手を経て、1964年にフリーの写真家として活動始める。1967年『カメラ毎日』に掲載した〈にっぽん劇場〉などのシリーズで日本写真批評家協会新人賞を受賞。SFMOMA(1999)、国立国際美術館(2011)、Tate Modern(2012)、IMS(2022)他、国内外で大規模な展覧会が開催され、ICP Infinity Award功労賞を受賞(2012)、フランス政府より芸術文化勲章(2018)、ハッセルブラッド国際写真賞(2019)を受賞するなど世界的に高い評価を受けている。

リンダー スターリング

Presented by CHANEL Nexus Hall

会場：京都文化博物館 別館

リンダーの作品は、芸術や文化における女性像の表象を挑発し、
インスピレーションを与え、そして再定義し続けている。

リンダー・スターリング

リンダー・スターリング（1954年生）は、イギリスで最も影響力があり、型破りな現代アーティストの一人です。1970年代後半のパンクシーンから登場した彼女は、写真やフォトモンタージュを大胆に用い、欲望や女性の身体に関する既成概念に挑み、それを再構築してきたことで高く評価されています。

アーティスト本人との綿密な協働のもと構成された本回顧展では、彼女の革新的な創作の軌跡をたどりながら、主要作品を紹介します。リンダー独自の視覚言語は、ハンナ・ヘッヒやマン・レイらダダイストの精神や、シュルレアリスムの夢幻的な挑発から着想を得ながらも、現代的な感性と視点を鮮烈に示しています。

リンダーの日本初の個展となる本展は、ロンドンのヘイワード・ギャラリーでの近年の回顧展に続いての開催となり、英国アートシーンにおいてフェミニズムの先駆者として独自の地位を築いてきた彼女の存在を強く裏付けるものです。



What I Do To Please You I Do, 1981–2008 © Linder, Courtesy of the artist and Modern Art, London



93. FEMALE

The Sphinx, 2021 © Linder, Courtesy of the artist and Modern Art, London



Oedipus, 2021 © Linder, Courtesy of the artist and Modern Art, London

ジュリエット アニエル

Presented by Van Cleef & Arpels

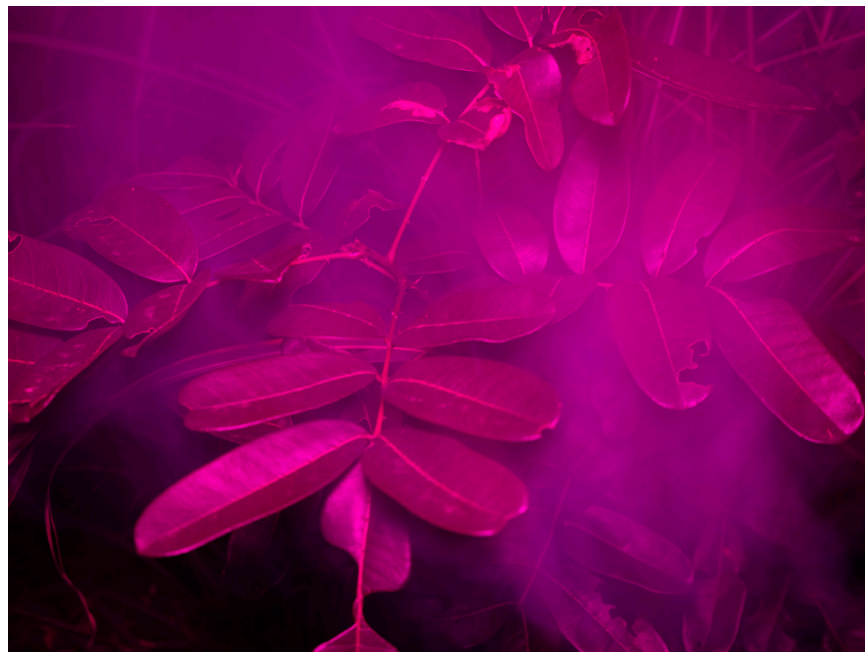
鉱物や植物を静謐^{せいひつ}に写し出すアニエルの作品は、聖なる場所に宿る
見えざる力と大地の強靱なスピリットを呼び覚ます

「私の作品は、見えるものと見えないものとの間に存在する関係、そして私たちを超越し、人間性の根幹に問いを投げかける絶対的な存在に根ざしています。私はある意味同じ探求を、たゆまずに続けています——私たちのまわりにありながらも目には見えない力を見ようと、私たちが深いところで結びつけているものをとらえ、そして、小さな人間の身体もまた宇宙を構成するひとつの重要な断片なのだということを思い起こすために」

—— ジュリエット・アニエル (2025)

ジュリエット・アニエルは、風景と光に向けた詩的で形而上学的なアプローチで知られるフランスのアーティストです。人間と自然、そしてそのあいだを結びつける目には見えない力学を探りながら、深夜の暗闇のなかで、あるいは砂漠や氷河といった辺境の地で制作を続けてきました。そうした場所で、アニエル自身が「世界の振動」と呼ぶものを捉えています。その実践は、哲学や人類学に通じるテーマと響き合い、主題であり象徴でもある時間や神話、そして光という存在に対する繊細な感受を浮かび上がらせています。

KYOTOGRAPHIE 2026では、ヴァン クリーフ&アーペルとのコラボレーションで制作されたカラーシリーズ〈Dahomey Spirit〉と〈Susceptibility of Rocks〉を展示予定です。



Juliette Agnel / courtesy Galerie Clémentine de la Féronnière & Photo Days



Juliette Agnel / courtesy Galerie Clémentine de la Féronnière & Photo Days

ジュリエット・アニエル

1973年フランス生まれ。フランス国立高等美術学校およびパリ第1大学で美術を学び、アナログ、デジタル、実験的画像など幅広い表現を探究している。世界を全体的な視点から捉えようとするアニエルは、写真を通して、風景にひそむ不可視の霊性を追い求めている。アルル国際写真祭で個展を開催し、フランスのジュ・ド・ポームやルーヴル美術館などのさまざまな文化機関で作品を発表。2023年にニエプス賞を受賞。

タンディウェ ムリウ

KYOTOGRAPHIE African Artist Residency Program

会場：出町榭形商店街
DELTA/KYOTOGRAPHIE Permanent Space

極彩色の代表作〈CAMO〉と、京都での滞在制作から紡ぎ出された新作、
テキスタイルの色や柄を読み解きながら制作された作品を2会場で展示

「ケニアと同じように、日本文化にも布の象徴性という「言語」は深く息づいています。

声に出して語られないものが、視覚的に示されることで豊かな意味を持つのです」

—— タンディウェ・ムリウ (2025)

タンディウェ・ムリウにとって写真は、自らの文化的なルーツをたたえるための方法であり、同時に、アイデンティティを形づくる文化的要因について問いを投げかけるための手段となっています。KYOTOGRAPHIEのアフリカン・アーティスト・イン・レジデンスとして招聘されたケニア出身のムリウは、その代表作と、京都で生まれた新作を展示する2つの展覧会を発表します。

女性として、ケニアで男性優位の構造のなかで生きてきたムリウは、社会における女性の役割、伝統がどのように機能しているか、そして自分自身をどう見つめるかという問いに、繰り返し向き合ってきました。こうした経験が〈CAMO〉シリーズの着想につながり、そのなかで被写体は背景のなかへと姿を消しつつ、同時に「自身を写し返すキャンバス」として立ち上がります。そして、日々の暮らしのなかにある日用品と、アーカイブ写真に着想を得た髪型が、ひとつひとつのイメージに隠された意味として織り込まれています。また、各写真にはアフリカのこたわがが添えられ、ムリウは視覚表象を通して文化を伝えとともに、世代を超えて受け継がれてきた口承の知恵をそこにそっと息づかせています。

〈CAMO〉に加えて、ムリウは京都でのレジデンス期間で新たに制作した作品も紹介します。ムリウ自身はこれまで来日したことはありませんでしたが、布やテキスタイルの歴史を辿る過程で、日本という存在に何度も行き当たったと言います。こうした関心を広げながら、日本で古くから用いられてきた布や文様を作品に取り入れ、ケニアと日本に通じる視覚言語のつながりや、その重なり合う歴史について探求しています。

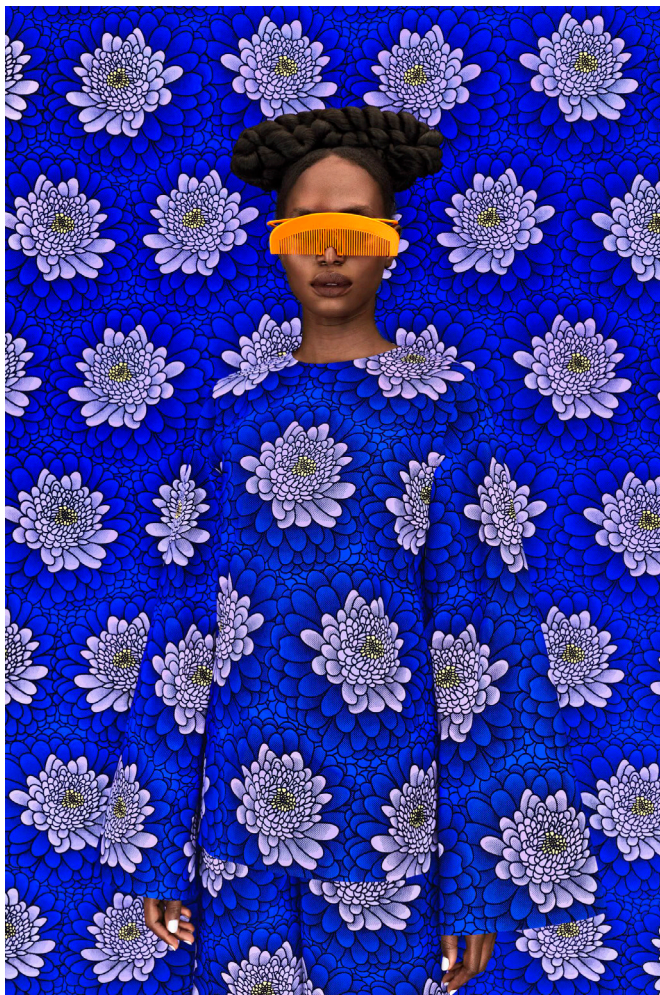


© Thandiwe Muriu, Courtesy 193 Gallery

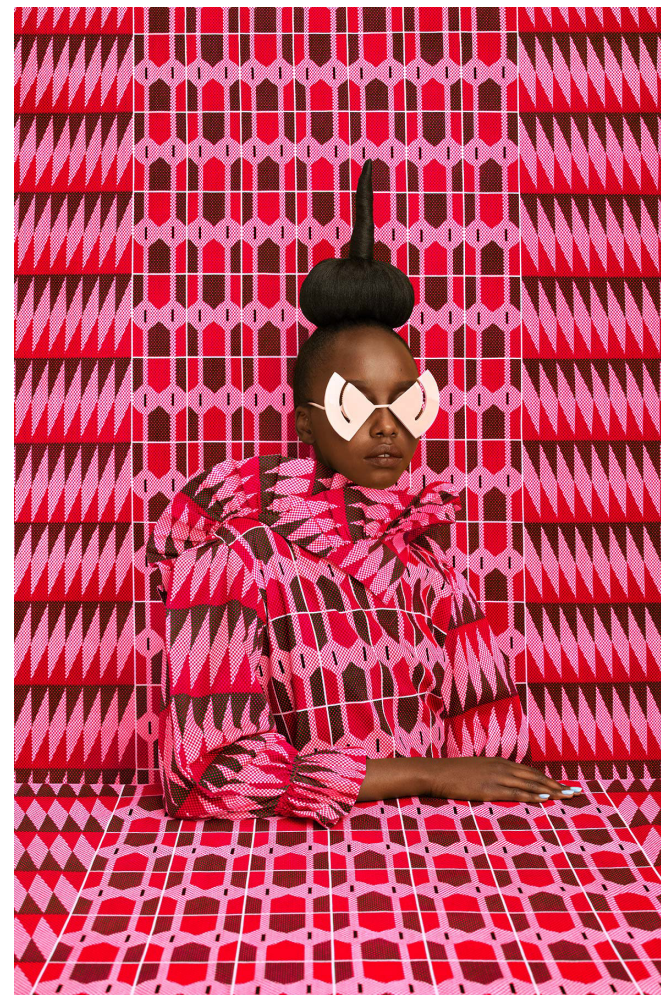
タンディウェ ムリウ CAMO

Presented by LONGCHAMP

会場：菅田屋源兵衛 竹院の間



The Space Between Love and Comfort, 2025 ©Thandiwe Muriu, Courtesy 193 Gallery



An Abundance of Plenty, 2024 ©Thandiwe Muriu, Courtesy 193 Gallery

タンディウェ・ムリウ

アイデンティティ、カルチャー、女性のエンパワーメントといったテーマを作品を通して探求するケニア出身の写真家。ムリウの作品は、主にアンカラ(*1)や東アフリカのカンガ布といったテキスタイルの物語から着想を得ており、それらの布をキャンバスとして再定義し、称え、記憶するために作品に用いている。現在もケニアを拠点に活動し、ラゴス芸術センター(ナイジェリア)が主催した第60回ヴェネツィア・ビエンナーレのコラテラルイベント(*2)「Passengers in Transit」、「WAX!」展(人類博物館 パリ)、ニューヨーク大学での個展「I Am Because You Are」など、世界各地で作品を発表している。また、ロックフェラー財団ベルラージオ・センターのレジデンス・プログラムや、ケニア国立博物館のレジデンス・プログラムにも参加している。

*1 主に西アフリカで幅広く使用される、鮮やかでカラフルな柄のろうけつ染めの布。別名ワックスプリント。

*2 ヴェネチア・ビエンナーレと同時期に近隣で開催される企画展。

柴田 早理

**フランス・シャンパーニュ地方の葡萄畑で、
葡萄が成熟するかのように時を重ねる女性を演じ、
自然への畏怖や感謝、故郷に伝わる継承を織り交ぜる**

「撮影を始めて、まずはあまりにも空が激しく移り変わることに気づきました。滞在中は季節も
ちょうど変わり目で、景色はどんどん変わっていきました。毎日違う空、そして風」

—— 柴田早理 (2025)

KYOTOGRAPHIE 2025で、ルイナール・ジャパン・アワードを受賞した柴田早理は、フランス・ランスにある長い歴史をもつシャンパーニュ・メゾンの本拠地に滞在しました。周囲を囲む畑や森のなかで季節のうつろいを見つめながら、柴田は本展で発表する女性が葡萄のように成長し成熟していくストーリーの作品群を形づくっていきました。

柴田は、環境が変わりゆく姿や、資本主義がもたらす影響を手がかりに制作を続けています。富山県南砺市の山あいの村で育ちましたが、成人してから多くの時間を都市で過ごしてきました。自然から離れていくその感覚が、彼女にとって「人間」と「自然」を作品の中で見つめ直すきっかけになったといいます。

「仕事や日々の生活で私はすっかり疲れ切っていましたが、ランスでは自然の中へ戻ることができ、その体験がどれほど深く心を動かすものなのかを思い出しました」と柴田は語ります。「レジデンスという限られた時間の中で、自然がいかに制御できない力を持っているのかを、あらためて思い知らされました」

Presented by Ruinart
Ruinart Japan Award 2025 Winner

会場: ASPHODEL



© Sari Shibata



© Sari Shibata



© Sari Shibata

柴田早理

富山県南砺市の山村に育ち、祖父のカメラで風景を撮影した経験から写真を始める。立教大学現代心理学部卒業後、大手IT企業の金融部門で勤務し、グローバル資本主義の構造に関心を持つ。2022年に夫婦で会社を設立。2025年、東京と南砺市の二拠点生活を開始し、古民家アールスペース「OSHITOPIA」を設立。能登半島地震を契機に、都市から見落とされる地方の視点を問い直す拠点として運営している。

Ruinart Japan Award

毎年、KYOTOGRAPHIEインターナショナル・ポートフォリオ・レビューの参加者から卓越した写真家1名がルイナール・ジャパン・アワードを受賞し、世界で最も古いシャンパーニュ・メゾンであるルイナールのレジデンスプログラムに参加します。受賞者はフランスのシャンパーニュ地方に招待され、新たな写真シリーズを制作し、翌年のKYOTOGRAPHIEで発表します。

イヴ・マルシャン & ロマ・メッフエル

フランスの写真家ユニットが、現代の廃墟を大判カメラで捉えた作品とともに、初期の写真機材で撮影した写真にAIのテクノロジーを組み合わせた作品や、京都を被写体に制作した新シリーズを発表

「廃墟は、空洞のポートレートであり、地勢であり、もうひとつの歴史を縁取る存在です。私たちの写真は、忘却と消失というプロセスの記録であり、その過程に応答しようとする試みでもあります」

—— イヴ・マルシャン & ロマ・メッフエル (2025)

20年以上にわたりデュオとして活動してきたイヴ・マルシャン & ロマ・メッフエルは、近代建築の廃墟を大判カメラで撮影した作品で広く知られています。北米各地の無人の劇場、日本の「軍艦島」、そしてデトロイトの都市衰退の風景など、その対象は多岐にわたります。近年、ふたりはAI技術を用いて、パリという都市そのものを「終末後」の廃墟へと変容させる実験にも取り組んできました。そこでは、ポンピドゥー・センターは錆びつき、ルーヴルのガラスピラミッドは砕け散り、ムーラン・ルージュは蒿に呑み込まれています。

KYOTOGRAPHIE 2026では、マルシャン & メッフエルが長年取り組んできた建築的廃墟についての研究である〈The Ruins of Detroit〉〈軍艦島〉〈Les Ruines de Paris〉のシリーズから作品を幅広く展示します。さらに、ふたりは京都でも新たなシリーズを制作します。パリと同じ手法を用い、AIによってこの古都を荒廃した廃墟へと変貌させる試みです。歴史と介入が交差するこの展示のなかで、マルシャン & メッフエルは、写真が持つ真正性、AIが私たちを欺き得る力、そして現実と虚構の境界のあわいに問いを投げかけます。



c803d74b-86ff-49a9-b633-3d83e9633402, Les Ruines de Paris, 2024 © Yves Marchand & Romain Meffre



Ballroom, Lee Plaza Hotel, The Ruins of Detroit, 2006 © Yves Marchand & Romain Meffre



Looking South from the embankment, Gunkanjima, 2012 © Yves Marchand & Romain Meffre

イヴ・マルシャン & ロマ・メッツフェル

大判カメラを用いて、現代の廃墟や崩れゆく建築物を撮影するフランス人の写真家ユニットである。それぞれ独学で写真を学び、2002年より共同制作を始める。アメリカの産業危機の象徴的ビジュアルとなったシリーズ『The Ruins of Detroit』（シュタイデル 2010）で広く知られるようになる。都市や建築群の衰退を長期間にわたって追うことが多く、ベッヒャー夫妻、ロバート・ポリドリ、カミロ・ホセ・ベルガラ、そしてより広い「廃墟文化」や都市探検の潮流に影響を受けている。

福島 あつし

Supported by Fujifilm

会場:ygion

農業における夏の収穫は、激しい労働と転換の季節である。

**福島あつしが活写する、秩序と無秩序が同居する農の現場に噴き上がる、
生と死のエネルギー**

「この作品は、目だけでなく、全身で体感していただけたらと思います。夏の畑のなかで生き、そして懸命に死んでいく生きものたちのエネルギーを感じてもらえたら嬉しいです」

—— 福島あつし(2025)

福島あつしは、いわゆる「写真家らしい」写真家ではありません。2004年に大学を卒業して以来、彼は弁当の配達員として働き、日本列島を縦断する旅に出ながら、農業に携わり、その度ごとに道中で出会った人びとや風景を撮り続けてきました。

KYOTOGRAPHIE 2026で福島は、農場で働く7年間のあいだに制作した作品を発表します。「友人から誘われて農家の端くれとなった僕は、当然のように農業＝穏やかな日常というものを期待していた。しかし、実際に僕が関わった農業はそれとは別世界だった。労働単価をいかに上げるかを追求し、そこに資金・アイデア・情熱など自分たちが持つ全てを注ぎ込み、事業を進めていく。そこに面白み、やりがいを感じながら生きていく。野菜を愛でる時間なんてありはしなかった」と福島は語ります。



© Atsushi Fukushima

今回の展示は、このプロジェクトにとって初めての大規模な発表となり、同時に福島がKYOTOGRAPHIEのメインプログラムへ戻ってくる節目でもあります。彼は2020年、KG+SELECT Award 2019を受賞した〈ぼくは独り暮らしの老人の家に弁当を運ぶ〉を出展しました。続く本展では、彼が記録してきた収穫の現場へと観客をいっそう深く誘い込み、会場内のキッチンスペースを使ったイベントを通じて、さらなる体験の場をひらくこととなるでしょう。



© Atsushi Fukushima



© Atsushi Fukushima



© Atsushi Fukushima

福島あつし

大阪芸術大学写真学科を卒業後、高齢者専用の弁当屋に配達員として勤務。10年間、独居老人に弁当を配達しながら写真を撮影をする。2019年に発表した作品〈ぼくは独り暮らしの老人に弁当を運ぶ〉がKG+SELECT Awardにてグランプリを受賞。2020年にはKYOTOGRAPHIEのメインプログラムとして展示し、翌年には青幻舎より写真集を刊行。2018年より農業従事者となる。人と自然との関わりをテーマに夏の激しい収穫期を撮影。今回のKYOTOGRAPHIEが初の大々的な展示となる。2022年には沖縄から北海道まで徒歩による日本縦断を敢行。コミュニケーションをテーマに道々での出会った人々を撮影。現在作品制作中。生きることは力強く美しいという理念を掲げながら写真を撮影している。

ファトマ ハッスーナ

**KYOTOGRAPHIEは、ハッスーナの写真作品の
スライドプロジェクションを通し、
彼女の生き生きとした生き様に敬意を表し、
パレスチナの平和を願い、その「大きな死」を追悼します**

「もし私が死ぬなら、私は大きな死を望む。ただの速報にも、数字のひとつにも
なりたくない。世界が耳を傾けるような、時間を越えて残るような死を望む」

—— ファトマ・ハッスーナ (Instagram, 2024)

ファトマ・ハッスーナは、想像を絶する状況のなかでガザの日常を記録し続けた、パレスチナの写真家
でありアクティヴィストでした。2025年4月16日、26歳の若さで、彼女は彼女自身を狙った爆撃に
より家族数名とともに命を落としました。

彼女の発信は、個人的でありながら生活に根ざしたまなざしに貫かれており、SNSを通じて大きな
注目を集めました。亡くなるまでの18カ月間、彼女は明るく揺るぎない存在となっていき、写真には
不正義と闘う力があると、心から信じ、活動していました。

KYOTOGRAPHIE 2026では、彼女の遺した貴重な写真作品を紹介し、ハッスーナの崇高な活動に
敬意を捧げます。国連の発表（2025年9月4日時点）によると、ガザではすでに少なくとも248人の
ジャーナリストが命を落としており、これは現代のいかなる戦争よりも多い人数です。ジャーナリストがこ
れまでにない危険にさらされている今、本展が、この大きな悲劇と、この1年で失われた無数の「命」に
ついて思いを寄せる、追悼の場となることを願っています。

会場：八竹庵（旧川崎家住宅）



© Fatma Hassona



© Fatma Hassona



© Fatma Hassona

ファトマ・ハッスーナ

パレスチナの写真家、作家、活動家。ハッスーナはガザにおける市民生活を記録し、国際的な評価を得た。セピデ・ファルシ監督によるドキュメンタリー映画『手に魂を込め、歩いてみれば』(2025)の主人公でもある。同作は2025年、ACID映画プログラムに選出され、カンヌ国際映画祭と並行して上映された。その翌日、2025年4月16日、イスラエルの空爆により、ハッスーナは家族10人とともに命を落とした。

フェデリコ エストル SHINE HEROES

**ボリビアの靴磨きたちとともに、周縁に追いやられたコミュニティを
ヒーローとして捉え直し、そのアイデンティティと結束を映し出す**

「ラパスに根強く残るスティグマを乗り越え、靴磨きの人びとが仮面を外し、「ふつうの働き手」として見られるようになること。それが私たちの願いです。KYOTOGRAPHIEは、この社会的な実践の理念を共有するうえで、まさにふさわしい場なのです」

——フェデリコ・エストル(2025)

「アートとアクティビズムを協働という方法でつなぎ合わせながら、フェデリコ・エストルは靴磨きの人びとを、レジリエンス、連帯、そして主体性回復の象徴として描き出す」

——アンドレア・ホルツヘル(マグナム・フォトグローバル・カルチャー・ディレクター/KG+SELECT 2025 審査員)

毎日、ボリビアのラパスでは3,000人を超える靴磨きの人びとが街に出ています。こうした匿名の働き手たちは、ボリビアにおける「非正規の経済活動」の一部を担っていますが、そのことで差別のまなざしにさらされやすい脆弱な立場に置かれ、基本的な労働の権利からもこぼれ落ちてしまいます。身元を隠すために変装をしているのは、近所の人びとは誰も彼ら、彼女らが靴磨きで生計を立てていることを知らず、家族でさえも別の仕事をしていると思っているためです。

靴磨きをする人びとは社会の周縁に追いやられています——しかし、エストルの写真のなかでは違います。エストルは、靴磨きの人びとを「ヒーロー」として捉え直しています。エストルは60人の靴磨きと、彼らを支援する地元の団体「Hormigón Armado」とともに作品制作を進めてきました。この団体は、靴磨きの人

KG+SELECT 2025 Award Winner

会場: 嶋臺(しまだい)ギャラリー 西館



Shine Heroes, 2018 © Federico Estol

びとの収入につながる月刊新聞を発行しています。2019年、エストルは写真特集号を制作し、その後、写真の世界におけるこのプロジェクトの成功をもとに、CD、おもちゃ、カレンダー、ポストカードといったさまざまなアイテムを制作してきました。

エストルは本作でKG+SELECT 2025 Awardを受賞し、KYOTOGRAPHIE 2026ではあらたな個展として開催します。会場には、ラパスで靴磨きの人びとが実際に使用してきた道具も展示予定です。彼ら、彼女らが身につけてきた仮面を、匿名性の象徴としてではなく、むしろ、「アイデンティティと団結」を象るものとして——。



Shine Heroes, 2018 © Federico Estol



Shine Heroes, 2018 © Federico Estol

フェデリコ・エストル

ウルグアイ出身のアーティスト兼アクティビスト。文化的アイデンティティ、不平等、社会正義の関係性を探求する物語を制作している。ウルグアイの国際写真祭「SAN JOSÉ FOTO (サンノゼフォト)」のアーティスティック・ディレクターおよびアルゼンチンのラ・プラタ国立大学 (UNLP) 芸術学部で写真の教授を務めている。写真集に特化した出版社 El Ministerio Ediciones で写真集の編集者としても活動している。エストルの作品はイーストウィング・ギャラリー (ドーハ／ベルリン) にて取り扱われ、2025 年よりアメリカのメディア「CatchLight Global」のフェローを務めている。

アントン コービン

50年にわたり世界の名だたる著名人たちのポートレートを撮影してきた 稀代の写真家の軌跡をたどるセレクトティブ・レトロスペクティブ（選集的回顧展）

「10代の頃、私にとって音楽は現実から逃れる手段でした。17歳のときに、「カメラを持てばその音楽の世界により近づくことができる」と気づいたからこそ、いまの私の作品は存在しています。なので初期の写真はすべてミュージシャンを撮っています。現在も私の写真の大部分はミュージシャンを撮影した作品ですが、80年代以降は映画、ファッション、アートなど、自分の興味が向く様々な領域へと進出していました。良い写真とは、被写体について語り、写真家について語り、そしてこれまでにない新しいイメージを見せてくれるものだと私は思います」

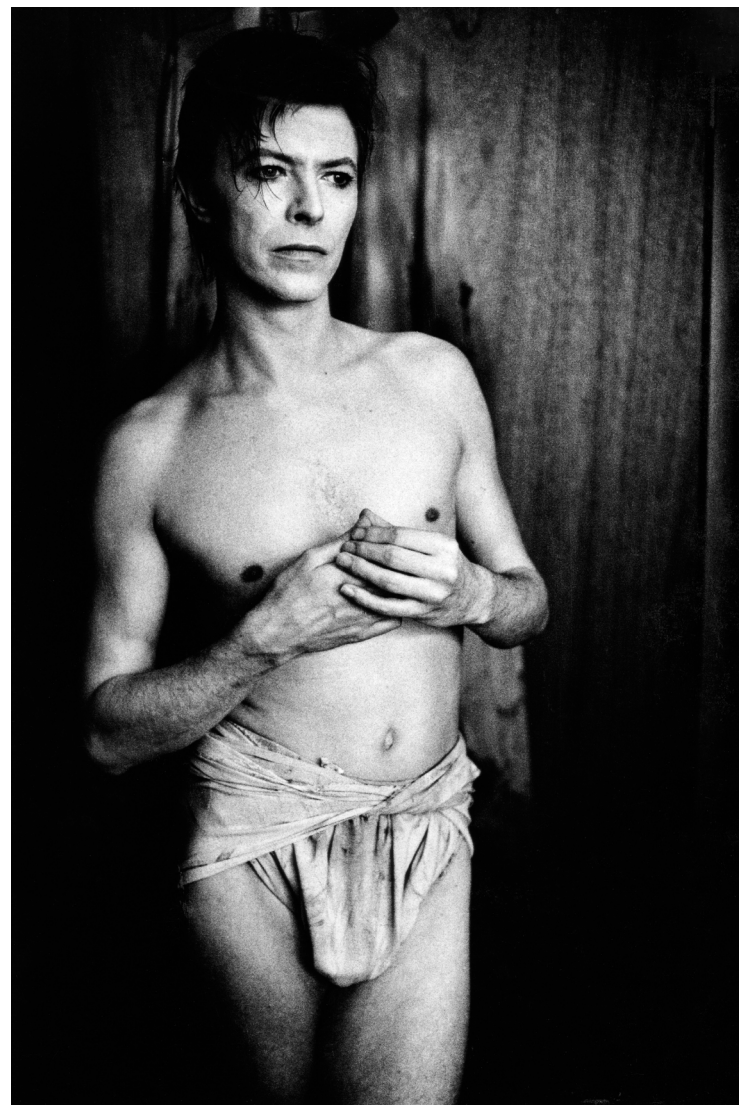
—— アントン・コービン（2025）

アントン・コービンは、デベッシュ・モード、U2、ローリング・ストーンズ、ゲルハルト・リヒター、アイ・ウェイウェイなど、世界的アーティストたちの姿を「永遠のイメージ」として写しとってきたことで広く知られています。彼が一貫して用いてきた独自のスタイル——スローシャッターによるモノクロ撮影——によって生み出されるコービンのポートレートは、被写体の繊細な動きやしぐさに宿る「身体性」を写し出しています。「完璧さよりも、不完全さの方がよほど「生」に近いと私は感じています」と、2015年の『TIME』誌のインタビューで語っています。

2025年、彼は70歳の誕生日と、アーティストとして50年の節目を迎えました。選集的回顧展というべき本展では、代表作からあまり知られていない作品まで幅広く紹介し、コービンの半世紀にわたる気鋭のポートレート表現の歩みをたどります。

Supported by agnès b.
With the patronage of the Embassy of
the Kingdom of Netherlands

会場：嶋臺（しまだい）ギャラリー 西館



David Bowie, Chicago, 1980 © Anton Corbijn



Kate Bush, London, 1982 © Anton Corbijn



U2, Bono (in bath), New York, 1992 © Anton Corbijn

アントン・コービン

1955年生まれ。写真家、映画監督、映像作家。オランダのストレインという小さな町に生まれ、17歳のときに地元のバンドの撮影を始め、その後ロンドンへ移り、イギリスの音楽雑誌『NME』のスタッフ・フォトグラファーとして活動した。これまでにニルヴァーナ、U2、デペッシュ・モード、ジョイ・ディヴィジョンなど、多数のミュージシャンのミュージックビデオを80本以上監督している。

SOUTH AFRICA IN FOCUS

**南アフリカの政治史と豊かな写真表現の伝統を体現する、
南アフリカの3世代による気鋭のアーティストの作品と
フォトブック・コレクションを展示**

2025年7月、KYOTOGRAPHIEの共同ディレクターであるルシール・レイボーズと仲西祐介は、ひと月にわたるリサーチのため南アフリカを訪れました。激動の歴史と長く受け継がれてきた写真文化に心を動かされたふたりは、2026年のフェスティバルの一環としてこの国にフォーカスすることに決めました。

プログラムには、南アフリカを代表する3世代の写真家が登場します。アパルトヘイトの実態を記録したアーネスト・コール、彷徨するような視線で現代を写し出すピーター・ヒューゴ、そして個人的な歴史と政治的な歴史を重ね合わせながら探求するレボハン・ハンイエなど、多彩な作品が紹介されます。そしてKYOTOGRAPHIEはケープタウンのアートラボラトリーA4 Arts Foundationと協働し、1940年代から現在までの南アフリカの歴史を辿るフォトブック・コレクションを展示します。また、KYOTOPHONIEでは南アフリカのミュージシャン、Msaki × Tubatsi を招聘し、オープニングセレモニーにて演奏予定です。

A4 Arts Foundation Photo book! Photo-book! Photobook!

会場:八竹庵(旧川崎家住宅)



Installation view (vitrine): *Photo book! Photo-book! Photobook!* curated by Sean O'Toole, 11 February–21 May 2022. Image © A4 Arts Foundation.

1940年代から現代まで、南アフリカの歴史や政治や文化を 「ブックメイキング」の芸術を通してたどる、 写真集をめくって学ぶ展覧会

「本展では、1945年から2025年に制作された、南アフリカの、そして南アフリカについての、多様な語りがときにぶつかりあうフォトブックの膨大な数のアーカイブをご紹介します。その焦点は国粹的な視点ではなく、あくまで地理的な広がりには置かれています。国外で刊行された本と、国内で作られた本とがひとつの場に並置される本展は、アパルトヘイト期のもっとも政治的に緊張した時代(1948–94)に、フォトブックでさえ国家の弾圧と検閲を受けていたにもかかわらず、越境的なブックカルチャーが形成されていたことを示しています。さらに、民主化以降(1994年–現在)に生まれた写真表現やブックデザインの領域での数多くの革新的な試みも紹介されます」

— ショーン・オトゥール (Instagram, 2024)

南アフリカの写真にフォーカスしたKYOTOGRAPHIE 2026の試みにあわせて、ケープタウンを拠点とするA4 Arts Foundationが、南アフリカの写真と歴史への理解を深めるために選書したフォトブックのコレクションを紹介します。この選書は数十年にわたる写真表現を横断し、1枚の写真が国をどのように縁取り、幻想をつくり、ときに問い直し、そして再構築してきたのかを詳らかにしていきます。本展「Photo book! Photo-book! Photobook!」は、2022年にA4 Arts Foundationで初めて開催され、その後もアップデートと再構成を重ねています。KYOTOGRAPHIE 2026では、南アフリカの写真集における革新、リスク、そしてレジスタンス(抵抗)といったテーマを探究する、A4のキュレーター、ショーン・オトゥールの新刊も展示します。同書には、アーネスト・コールの『House of Bondage』(1967)、デイヴィッド・ゴールドブラットの『In Boksburg』(1982)について緻密に書かれたエッセイに加え、1950年代以降に出版された約50冊の重要な写真集の解説が収録されています。

A4 Arts Foundation

2017年にケープタウンで創設された「アートのための実験室」。アーティストやアートワーカーを支援すると同時に、創作やキュレーションの過程を開かれたかたちで観客と共有できる場を提供している。ケープタウンのスペースには、公共に開かれた図書室、作品展示や共有のための可変式のスペース、レジデンスプログラム、ブックショップ、文化的な営みを日々支えるスタッフのためのオフィスが集約。「アーティストやアートワーカーこそが、社会的にも環境的にも公正な新しい未来を想像し、実験し、創り出すための独自の力を持っている」という信念のもと、アートの実験的实践に取り組んでいる。

アーネスト コール HOUSE OF BONDAGE

「黒人」写真家アーネスト・コールが遺した、南アフリカの アパルトヘイトを内側から捉えた歴史的記録を本邦初公開

「南アフリカは私の国だ。しかし同時に、私の地獄でもある」

「人生そのものが罰のように感じられる——そんな日々を生きることが、
どれほど途方もない経験か。黒人であるがゆえに」

「南アフリカにおける300年に及ぶ白人至上主義は、私たちを束縛し、
尊厳を奪い、自尊心を盗み取り、憎悪に囲まれた状況へと追いやってきた」

——アーネスト・コール『House of Bondage』(1967)

アーネスト・コールによる『House of Bondage』(1967)は、アパルトヘイトの実態を世界に明らかにした最初期の写真集です。
特筆すべきは、それが「黒人」写真家自身の視点から、黒人の経験を初めて提示する出版物だったことでしょう。

1940年に生まれたコールは、南アフリカで最初期の黒人フォトジャーナリストのひとりとなり、鉱山労働者や家事労働者の生活から、交通・教育・医療の制度の実情に至るまで、あらゆる現場をひそかに撮影しました。南アフリカの黒人コミュニティによって黒人読者向けに出版された雑誌『DRUM』やニューヨーク・タイムズの依頼を受けながらも、彼は並行して『House of Bondage』のための撮影を続けていました。

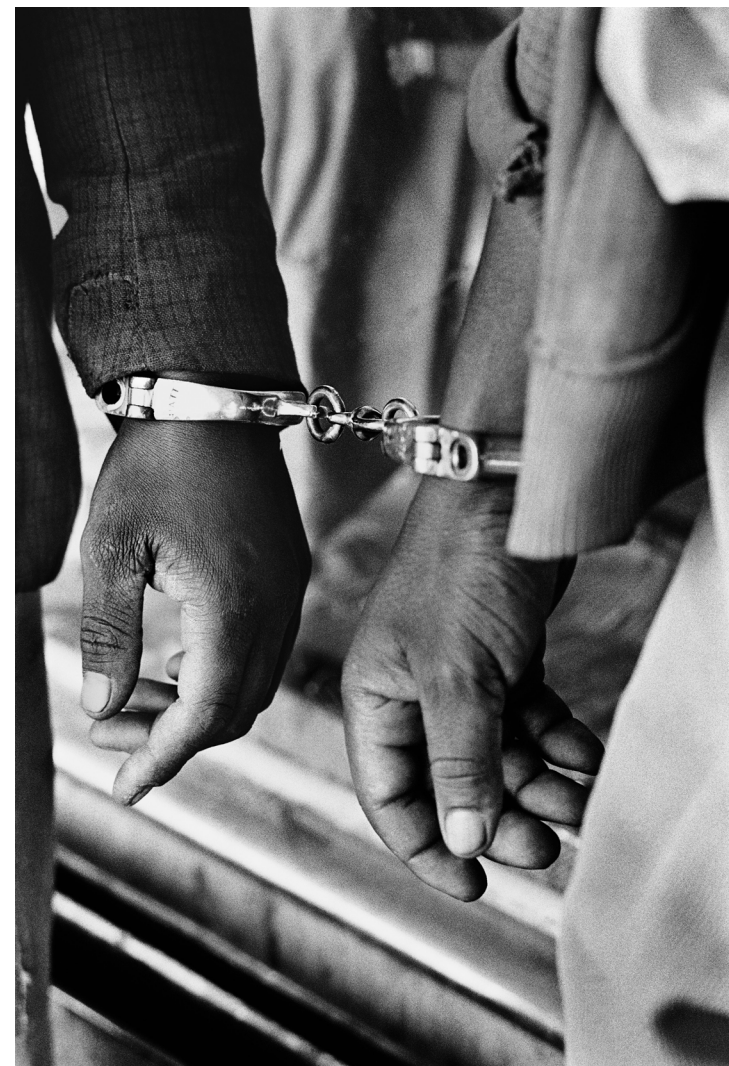
1966年、コールは南アフリカを逃れニューヨークへ渡ります。翌年に『House of Bondage』を刊行したことで、彼は母国への永続的な入国禁止措置を受けました。今日でもこの写真集は、アパルトヘイトを告発した最も影響力のある記録のひとつとして位置づけられ、その暴虐の実態を世界に暴き出した作品として高く評価されています。

本展では、コール自身が撮影した写真、雑誌の表紙、そして彼が残した個人的なノートを展示します。構成は、彼のオリジナルの写真集に沿い、15のテーマに分けられています。日本で初めて紹介されるこの大規模な展覧会は、コールが遺した揺るぎない誠実さと、その遺業に触れられる、またとない機会となるでしょう。

Supported by Cheerio
In collaboration with Magnum Photos

キュレーター：アンドレア・ホルツヘル

会場：京都市京セラ美術館 本館 南回廊 2階



手錠をかけられた黒人、不法に白人専用地区にいたとして逮捕される。南アフリカ、1960年代 © Ernest Cole / Magnum Photos



床にひざまずいて字を書く生徒たち。政府は黒人のための学校設備に無関心である。南アフリカ、1960年代 © Ernest Cole / Magnum Photos



人種隔離を示す標識。南アフリカ、1960年代 © Ernest Cole / Magnum Photos

アーネスト・コール

1940年南アフリカ、トランスヴァール生まれ。1990年、ニューヨークにて逝去。1967年に出版された記念碑的な著書『House of Bondage』で名を馳せる。コールの初期の作品は、『DRUM』誌やニューヨーク・タイムズなどに掲載され、アパルトヘイトの実態を記録した。1966年、彼は南アフリカを逃れ、1968年にはアパルトヘイト政策下の南アフリカによってパスポートを剥奪された。北米に移り住んでからはストリートフォトに専念するも、1972年頃から生活が乱れ始め、写真家としての活動を停止する。ホームレス状態を経験する時期を経て、膀胱がんのため49歳で他界する。

ピーター・ヒューゴ WHAT THE LIGHT FALLS ON

**23年にわたり積み重ねられてきた膨大な数の撮影を通じ、
生と死、そしてそのはざまにある儀礼について深く思索する**

「最初に自分が写真に惹かれた原点へと立ち返りたかったのです。好奇心、この世界に「いる」という感覚、移ろいゆくこと、そして写真というメディアが「死」と結んできた長い関係性へと」

—— ピーター・ヒューゴ (2025)

ヒューゴの初期のプロジェクトは、明確なテーマのもとに構築されたヴィジュアル・エッセイの形式を取っていましたが、〈What the Light Falls On〉シリーズでは、より自由なアプローチが取られています。決められた枠組みの内側で制作するのではなく、彼は場所と時間に直感的に反応し、「根源的な彷徨衝動」と自身が名付けたものに導かれながら撮影を行っています。20年以上にわたって向き合ってきたこのシリーズでは、ポートレート、風景、静物が交差し、経験と情動のありようについての対話的で個人的な省察へとつながっています。

この作品群の中心には、死に対する思索があります。〈What the Light Falls On〉は「生」から始まり「死」で終わります——冒頭には娘の誕生の瞬間が登場し、最後には亡き父の臨終の姿が収められています。ヒューゴはこう語ります。「これは中年期と結びついたものなのです」と彼は言います。「肉体的にも精神的にも柔らかくなっていくこと、美と悲劇、残酷さと優しさ——これらが繰り返される生命の循環のこともあるのです。哲学者セネカが簡潔に述べたように、「あらゆる新しい始まりは、別の始まりの終わりから生まれる」のです」

会場：京都市京セラ美術館 本館 南回廊 2階



Sophie on the winter solstice, Nature's Valley, 2020 © Pieter Hugo



Afternoon nap interrupted, Nature's Valley, 2012 © Pieter Hugo



Frog Mountain, Swellendam, 2018 © Pieter Hugo



Truck driver, Kano, 2023 © Pieter Hugo

ピーター・ヒューゴ

1976年、ヨハネスブルグ生まれ。ケープタウンを拠点に活動する写真家。ムゼウ・コレソン・ベラルド、ハーグ写真美術館、エリゼ写真美術館（スイス ローザンヌ）、ストックホルム写真美術館、イタリア国立21世紀美術館（MAXXI）など、多くの機関で大規模な個展を開催している。2008年には、アルル国際写真祭のディスカバリー賞とKLMポール・ハフ賞の両方を受賞。2012年にはドイツ銀行写真賞のショートリストに選出され、2015年にはブリ・ビクテの最終候補に選出される。

レボハン ハンイエ

Presented by DIOR

キュレーター：マリナ・パウレンカ

ヨハネスブルグを拠点とするレボハンにとって、物語を紡ぐ営みとは、
言葉、写真、彫刻、そしてオーラル・ヒストリーを横断する多層的な表現である

「写真はずっと「証拠」のための道具だと言われてきましたが、実際には「想像」のための道具でもあるのです」

——レボハン・ハンイエ (Fotografiska、2025)

「レボハンの作品は、歴史を「完結したもの」ではなく、私たちの内側でいまでも深く生き続けているものとして扱っています。南アフリカ出身の彼女は、喪失や移動、受け継がれてしまった暴力により形づくられた物語を背負っていると言えます。けれども彼女は、それらを解決したり、劇的に語り立てようとはしません。ただ、耳を澄まそうとするのです」

——マリナ・パウレンカ (2025)

レボハン・ハンイエが写真に出会ったのは偶然でした。もともとはジャーナリズムを志していましたが、進学が叶わず、デイヴィッド・ゴールドブラットによって設立された名高い Market Photo Workshop に入学したことで、自身の進むべき道を見つけることになります。彼女の表現は現在、写真にとどまらず、アニメーション、インスタレーション、テキスタイルへと広がり、文学や演劇、歴史への深い関心とも結びついています。

ハンイエは、KYOTOGRAPHIE 2026で日本初となる大規模な個展を開催します。今回取り上げるのは、〈Keep the Light Faithfully〉〈Mohlokomedi wa Tora〉〈Mosebetsi wa Dirithi〉〈The Sea Is History〉〈Ke Lefa Laka: Her-story〉という5つの重要なシリーズ

です。これらの作品群は、個人史と歴史的物語がどのように形成され、断片化され、そして再び構築されていくのかを探っています。

切り抜かれたシルエット、演出写真、ジオラマのライトボックス、布や影、彫刻的な介入——。ハンイエはこうした多様な技法を通じて、南アフリカの個人的な記憶の断片が、より広い政治的かつポストコロニアルな現実と重なり合う層状の世界をつくりあげています。これらのシリーズを通じて、ハンイエは、未完のアーカイブを受け継ぐとはなにを意味するのか、空白をどのように埋め、他者の歴史をどのように守るのか、そしてときに「虚構」こそがより誠実なかたちで「真実」を照らすことがあるのはなぜなのか、その倫理を問い続けています。



Gladys, 2022 © Lebohang Kganye



Setupung sa kwana hae II, 2013 © Lebohang Kganye



Woman in middle of night, 2022 © Lebohang Kganye

レボハン・ハンイエ

1990年南アフリカ生まれ。写真、歴史、リサーチ、演劇性、自伝性、詩的表現を重ね合わせ、時として彫刻的なインスタレーションに昇華するアーティストである。ベルリン写真美術館、テート・モダン、Foam(オランダ)、LE BAL(フランス)など著名な機関で展覧会を開催。主な受賞歴にドイツ証券取引所財団賞(2024)、ICPインフィニティ賞(2025)、Foamポール・ハフ賞(2022)などがある。ハンイエの作品は、メトロポリタン美術館、ポンピドゥー・センター、スミソニアン国立アフリカ美術館、ヴィクトリア&アルバート博物館、パリ市立近代美術館、ヒューストン美術館、ゲティ美術館、チャゼン美術館など、多くの美術館に収蔵されている。現在MoMA(アメリカ)で開催中のグループ展「New Photography 2025: Lines of Belonging」に出展している。

Public Events and Education

KYOTOGRAPHIEでは、マスタークラスやポートフォリオレビュー、アーティストトーク、フィルムスクリーニング、そして子ども向けイベントなど、あらゆる年齢やレベルの人々が写真により深く関わるための、多様なプログラムを提供しています。

キッズプログラム

フェスティバル期間中、写真や工芸の実践的なワークショップを多数開催し、子どもたちが自由に考え、対話し、表現できる機会を創出します。無料で配布している「キッズパスポート」は、子どもやファミリーのためにKYOTOGRAPHIEの展示をわかりやすく解説し、例年好評いただいています。また、年間を通じて京都市教育委員会と連携し、学校での写真教育プログラムも実施しています。参加した児童や生徒は「KYOTOGRAPHIE子ども写真コンクール」に応募することができ、フェスティバル期間中に展覧会と授賞式を開催します。



マスタークラス

マスタークラスは、参加者がKYOTOGRAPHIEメインプログラムの参加アーティストらから直接学べる貴重な機会です。アーティスト自身の実践から着想を得て、創造的な探求と実践的な学びを組み合わせしており、経験やスキルを問わず誰でも参加できます。



パブリック・イベント

アーティストトーク、アーティストツアー、フィルムスクリーニング、パネルディスカッションなど多彩なプログラムを開催し、参加アーティストやキュレーター、展示空間デザイナーなど、各領域の第一人者と交流する機会を提供します。イベントを通じ、参加者は展覧会の背景にある文脈や社会課題について理解を深めることができ、今日の写真表現や視覚表現を取り巻く重要な課題にもフォーカスしていきます。



インターナショナル・ ポートフォリオレビュー

毎年開催されるインターナショナル・ポートフォリオレビューでは、世界各地から写真界の第一人者を招聘し、応募者と一対一のセッションを行い、個別にアドバイスを受けることができ、ネットワーキングの機会の創出を促進します。参加者の中から、さらなる支援や発表の場が与えられる「Fujifilm Award」や「Ruinart Japan Award」の受賞者が選出されます。



KYOTOGRAPHIE & KG+ フォトブックフェア

世界中の出版社が一堂に会するフォトブックフェアは、フォトシーンにとって重要な出会いと交流の場として、例年多くの方にご来場いただいています。KYOTOGRAPHIEおよびKG+のアーティストによるフォトブックに加え、国内外の作家によるさまざまなフォトブックを購入することができます。



KYOTOGRAPHIE 2026

開催概要

全てのプログラム内容・展覧会名・会場の情報は2025年12月3日現在のもので、予告なく変更になる可能性があります。また後日、追加情報を発表いたします。

開催日程: **2026年4月18日[土]ー 5月17日[日]**

プレス向け内覧会: **2026年4月17日[金]**

会期: **30日間**

メインプログラム数: **14**

参加アーティスト数: **13組** (8カ国)

パスポートチケット

一般: **¥6,000** (前売り ¥5,500～)

学生: **¥3,000** (前売りも同額)

全会場をご覧いただけるチケット(会期中1回のみ)
2026年2月下旬より発売予定

KG+

KYOTOGRAPHIE SATELLITE EVENT KG+

KG+は、これからの活躍が期待される写真家やキュレーターの発掘と支援を目的に、2013年にスタートした国際的な公募型アートフェスティバルです。2026年には第14回を迎え、京都各地で幅広い展示やプロジェクトを展開します——個展やグループ展から、ギャラリー、美術館、学校とのコラボレーションに至るまで活動は多岐にわたります。KG+は新たな才能のための国際的なプラットフォームへと成長し、街中で開催される展示、トーク、ワークショップ、写真集に焦点を当てたイベントなどを通して、コミュニティの幅を広げています。

KG+ 2026

公募期間	開催期間	プレスレビュー	場所
2025年 11. 01[土]－12.31[水]	2026年 4.18[土]－5.17[日]	2026年 4.17[金]	京都市内各所 (約100会場)



Winner of KG+SELECT Award 2025 announced at the Award Ceremony.

KG+SELECT Supported by SIGMA

国内外の応募者の中から10組のアーティストが選ばれ、展覧会を開催していただきます。選ばれた10組のアーティストには展示制作補助金として20万円が支給されます。各展示を審査委員会が訪問し、グランプリを選出します。グランプリは50万円の制作補助金とともに、次年度のKYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭にてメインプログラムのひとつとして展覧会を開催することができます。

KG+

アーティスト、キュレーター、ギャラリー、美術館、教育文化機関等が企画・主催する個展、グループ展、およびフェスティバルの協賛企業による展覧会。

KG+ DISCOVERY Award Supported by Fujifilm

KG+ディスカバリーアワードは、KG+SELECTを除くKG+の展覧会の中から、最も優れた作家1名(1組)を選出するアワードです。KYOTOGRAPHIEの会期中に開催される多彩な展覧会の中から、未だ見ぬ才能を発掘・発信することを目的としています。応募書類による一次審査を経て選ばれたファイナリストは、KG+会期中にプレゼンテーション審査を行い、受賞者を決定します。受賞者には、個展開催の機会と副賞が授与され、さらなる飛躍と注目が期待されます。

KG+ SELECT 2026 FINALIST

Supported by Sigma

くろちく万蔵ビル

今年は、過去最多となる400件を超える応募の中から10名のアーティストが選ばれました。以下の写真家たちは、フェスティバル期間中にくろちく万蔵ビルの各自のブースにて個展を開催し、グランプリ受賞者が次回のKYOTOGRAPHIEで個展を開催するチャンスを得ます。



中西宗平
日本



ミラ・レイ・サーラバイ
日本



キム・ウンジュ
韓国



ソ・ミンギョン
韓国



平良博義
日本



スリダー・バラシュブラマニヤム
インド



リュ・ヒョンミン
韓国



ピオトル・ズビエルスキ
ポーランド



岸本 紇
日本



ワン・チャオファン
中国

各ファイナリストのウェブサイトや
SNSはこちらからご覧いただけます



KYOTOGRAPHIE: 京都物語 | 十二支

12th ANNIVERSARY BOOK

「KYOTOGRAPHIEのプログラムには、海外と日本の写真文化の架け橋というだけでなく、一貫したメッセージが読み取れる。それを一言でいうなら、他者へのリスペクトだ。人間の多様な価値観や感性、生き方を受け入れるために写真文化の豊かさを信じ、それをシェアすること。そのような姿勢は、利己主義と排外主義が蔓延するこの世界において、ますます切実に求められている。KYOTOGRAPHIEが私たちに与えるものとは何よりも、言い訳をして諦めることなく、まだ見ぬ花を夢見て歩いてゆくための勇気である」—— 竹内万里子 (写真批評家)

KYOTOGRAPHIE の12周年、そして干支が一巡する節目を記念して12周年記念本『KYOTOGRAPHIE: 京都物語 | 十二支』を刊行しました。本書とともに、フェスティバルの物語をひもときます。大きな夢から始まり、やがて写真の国際的な舞台へと成長した軌跡。共同創設者、共同ディレクターであるルシール・レイボーズと仲西祐介による個人的な語りを道しるべに、人々、場、そしてフェスティバルを形作ってきた数々の瞬間を辿ります。アーティスト、キュレーターなど、各界の第一人者たちによるエッセイや証言が、その物語に寄り添います。写真と対話が満載の本書は、単なるアーカイブではありません。フェスティバルを支えるコミュニティへの賛歌であり、そのすべてを可能にしてきた方たちへの感謝の証でもあります。

初めてKYOTOGRAPHIEに触れる方も、これまでフェスティバルを訪れ同じ時間を歩んできた方も、この一冊を通して、唯一無二のフェスティバルを形作ってきた物語と思想に出会うことができます。

寄稿 片岡真実 (森美術館館長、国立アートリサーチセンター長)、フランソワ・エベル 国際写真センター (ICP、ニューヨーク) 理事、リシャール・コラス

対話 小西啓睦 (miso | 空間デザイナー、セノグラファー)、山口源兵衛 (帯匠「誉田屋源兵衛」十代目)、ウスビ・サコ (東京都公立大学法人教授・理事)、クロード・グルネツキー (「The Equity Alliance」CEO 兼 マネージング・パートナー、「TRUE Africa」編集長)、榮榮&映里 (写真家、「三影堂撮影芸術中心」創設者)、ローレン・ハドラー (KYOTOGRAPHIE インターナショナル・パートナーシップ 統括)

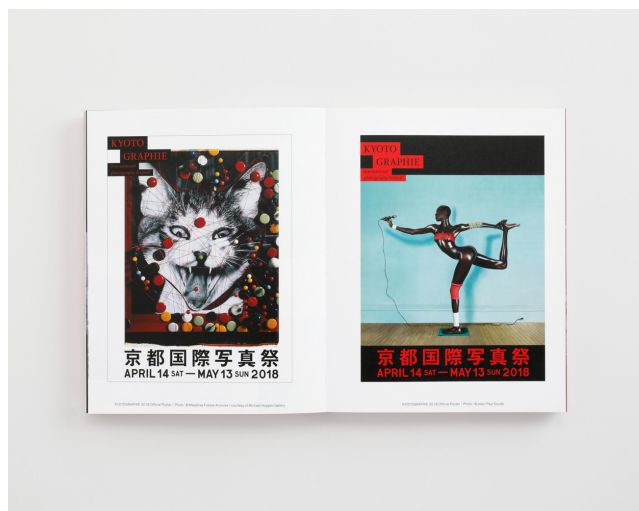
PORT FOLIO インマ・バレッロ、ココ・カビタン、オマー・ヴィクター・ディオブ、ジョアナ・シュマリ、プリンス・ジャスイ、JR、レティシア・キイ、アルノ・ラファエル・ミンキネン、イサベル・ムニョス、パオロ・ペレグリン、K-NARF & SHOKO、ンガディ・スマート、マリアン・ティーウェン、ヨリヤス (ヤシン・アラウィ・イスマイリ)



ご購入

KYOTOGRAPHIE オフィシャルオンラインショップ
青幻舎 オンラインショップ
Amazon
蔦屋書店、大垣書店、丸善ジュンク堂 などの一部書店





仕様

2025年4月12日 初版発行
 サイズ: 245 × 195 × 50mm
 製本: ハードカバー(糸かがり綴じ)
 ページ: 460P
 編集: 大野秀子 グレイス

ブックデザイン: 山田浩之 (RAS Inc.)
 発行: 一般社団法人KYOTOGRAPHIE
 発売元: 株式会社 青幻舎
 印刷・製本: 株式会社サンエムカラー
 価格: ¥8,800

KYOTOGRAPHIE × 森岡書店(銀座)

12周年記念本
 『KYOTOGRAPHIE: 京都物語 | 十二支』
 特別展 開催

日程

2025年12月23日(火) - 28日(日)
 1:00PM - 7:00PM(会期中、店休日なし)

会場

森岡書店
 〒104-0061 東京都中央区銀座1丁目28-15 鈴木ビル